ろう。今は薄い雲が、朱色と紫色とに染まっている。

怪しげなもの――それは人影に見えた。

大きな棕櫚（しゅろ）の下で、風に揺れる葉っぱにあわせて、ゆらゆらとしている。棕櫚の下は薄暗くて姿形の判別ができない。腕があるようにも見えるし、足があるようにも見えるが、ただの柱にも見える。しかし揺れているのだ。

六郎は足を止めた。あたりを見回すと、まだにぎやかなはずの商店街に人通りがない。店のあかりは道にもれているが、余計に影を濃くしている。

商店街の真ん中に、一軒だけ普通の家がある。粗いコンクリートの塀が、六郎の歩幅で十二歩分続く。丈が低いから内側の庭がよく見える。そこに棕櫚が立っている。二階くらいの高さの木だ。子どもの頃からそこにあって、これまでなんとも思ってなかったが、今は違った。

その影はその棕櫚と並ぶかのように立ってはいるものの、根元は塀の外にあった。人にしか見えない。しかし六郎は人ではないと思った。

中学二年にもなって、おばけはおろか幽霊だって信じてない。工作好きでたいていのことは科学的な説明がつくと、頭ではわかっている。だが、これは違う。人はあんな揺れ方はしない。六郎の足がすくむ。じっと見つめてしまう。

影の揺れが止まった。そして、人ならば顔のあたりが、ぱっと白くなった。

大きな白目だった。

白目が六郎を見た。

足が急にぞわっとし、くるぶしのあたりに気持ち悪さを感じた。動けるようになったとたん、六郎は回れ右をして今出てきた菅生道具店まで走り、店に飛びこんだ。

「どうしたの六ちゃん」

代替わりしたばかりの店主――長大（ながひろ）さんが棚の整理の手を止め、息を荒げている六郎を見て、人懐こく笑った。

「なんか、買い忘れた？」

「ち、ちが」

声を出そうとして、のどがからからに渇いているのに気がついた。つばを出そうとするものの、すこしも湿らない。六郎は外を指差した。

「外でなんかあった？」

口をぱくぱくさせるばかりの六郎の横をすりぬけて、長大さんは店の表に出た。六郎もついていき、もう一度指をさしてみせた。外はすっかり暗くなっていて、街灯と店のあかりとが一列に並んでいた。人通りが戻っていた。影はいなかった。

「なに、わからないよ」

長大さん越しに体にしがみつくようにして、棕櫚のある家のほうを見たが、さっきの影は見えなかった。遠いから